



菅田中学校だより

6月号

創造の意気ここにあり

令和4年6月1日
学校長 遠藤まり

学校ホームページ
<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/jhs/sugeta/>



校外学習で「チーム・ビルディング」を学ぶ

副校長 三藤 敏樹

5月、菅田中学校では3学年とも校外学習が実施されました。それぞれ内容は異なっていますが、クラスのメンバーで課題解決に取り組んだり、班で協力して行動したりする場面がたくさんありました。通常、そのような少人数の集団のことを「チーム」と呼んだり、「グループ」と呼んだりしていますが、この「チーム」と「グループ」という言葉は、意図的に使い分ける場面があります。この2つの言葉はどちらも「集団」を意味していますが、「グループ」が「目的の有無を問わない集団」であるのに対し、「チーム」とは「共通の目的を達成するための集団」であり、同じ目的に向かって目標を設定し、たとえ気が進まないことであっても役割分担に従って活動をする必要がある集団という意味で使われることがある言葉です。

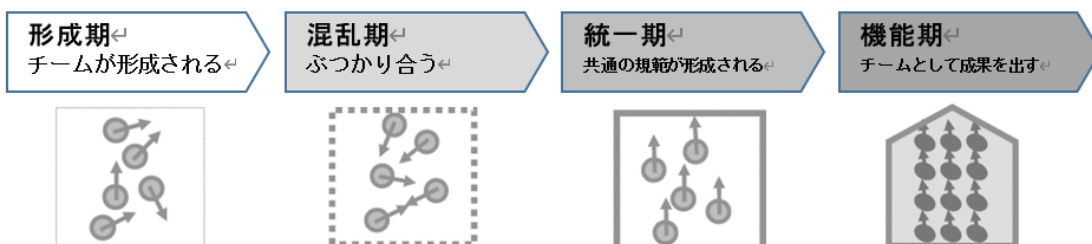
私は8年前に、横浜市立学校教員の「長期企業等研修派遣」事業で、横浜に本社のある自動車会社の人事部に1年間勤務しました。そこで、「チーム・ビルディング研修」というプログラムを担当したことがあります。それはまさに、会社という組織の中で「チーム」を「ビルド」する（建てる、作る、築く）ためにどのようなことを考え、どのように行動すればよいか、ということについて、体験を通して学ぶ内容でした。

『広辞苑』では、「グループ」は「①群、集団 ②共通点をもつ人や物の集まり」、「チーム」は「①共通で仕事をする一団の人 ②二組以上に分かれて行う競技のそれぞれの組」と定義されています。ここから考えると、「グループ」では、その活動の成果は個々のメンバーの貢献の総和である。言い換えれば一人一人が単に「足し算」のイメージでつながっているものであるのに対して、「チーム」とは、集団の中で複数の人が一つの目的を共有し、相互に良い影響を与え合う関係が構築されていて、その活動の成果はメンバーが集団の中で協調を通じてプラスの相乗効果を生んでいる、言わば一人一人「掛け算」でつながって全体を形成しているイメージであると言えます。

私たちは日常「チームワーク」という言葉をよく使います。「チームワーク」とは、複数の人が共同で活動するとき、バラバラで動くのではなく、互いに協力したり役割分担をしたりして、チームが一丸となって一つの目標を追求し、全体の成果をあげようとする営みのことです。このことは、体育祭の大縄跳びや、今後取り組んでいく合唱のことを思い出せば、すぐに理解することができます。

そして、「チーム・ビルディング」とは、ある特定の課題や目標に対して、チームのメンバーが役割を分担し、一定のルールのもとに解決に向かう営みの中で、リーダーシップやメンバーシップを発揮し合ってコミュニケーションを図り、相乗効果を生むこと、そしてチーム自体が学習する組織に成長する、すなわち、「グループ」を「チーム」に変えるための方法や取組のことを言います。そこでは、メンバーの一人一人が主体的に考え、議論に参加し、行動することが求められます。

チーム・ビルディングについて、アメリカの心理学者ブルース・W・タックマンは、次の4つのプロセスを提唱しました（これをタックマン・モデルと言います）。



たとえば、Jリーグや海外の各チームから代表選手が招集される日本代表のチームも、最初は様子見をしたり、チームも目標が共有できていなかったりする段階があります。これが「形成期」です。練習を進めていくにつれて、意見や主張のぶつかり合いが起こるようになります。これが「混乱期」です。やがて、それを乗り越えると、お互いを理解し合い、目標がしっかりメンバーに共有され、チームとして従うルールが定着する段階、「統一期」を迎えます。そして、チームが機能してチーム自ら規律を生み出し、メンバーが自律的に動き、さらに成果が生まれる段階を迎えます。これが「機能期」です。

このタックマン・モデルでは、いかなるチームも「混乱期」を避けて通ることはできないと考えられています。そう考えると、たとえば体育祭や合唱コンクールに向けてクラスのメンバーに意見の不統一があったとしてもそれは当然のこと、いわゆるヘルシー・コンフリクト（健全な対立）であると考えて次の段階である「統一期」に向かうことができるはずです。私たちが参画しているチームはどうでしょうか。目標の達成や課題の解決に向けて、自分のチーム（クラス、部活動、家族など）の状況を振り返り、メンバーどうして議論してみてもいいかがでしょうか。

（「チーム・ビルディング」については堀公俊ほか『チーム・ビルディング』（2007年 日本経済新聞社）を参考にしました。）